五　洋画の先駆者　そして国際人として活やくした　百武兼行（一八四二～一八八四）

みなさんは、百武兼行という人を知っていますか。

兼行は、日本人の中でもっとも早い時期に洋画の勉強や制作に取り組んだ人で、その生涯の半分ほどを海外ですごした人です。

百武兼行（佐賀新聞社提供）

兼行は、天保十三年（一八四二）、佐賀市片田江に生まれ、九歳の時、四歳年下の藩主直大の相手役に選ばれました。そのころの藩士の子どもは、藩校弘道館にかよっていましたが、兼行は、直大とともに学者から個人的に漢文や書、絵画などを学びました。また、青年期には、英語を学び、大隈重信や副島種臣など明治維新に活やくした佐賀※の七賢人とよばれる人たちとも親しくつきあい、西洋文明へ心を開いていきました。

明治四年（一八七一）十一月、政府は、岩倉具視、大久保利通、伊藤博文などの欧米視察団をはけんしました。その時、世界の知識、文明を自分の目で確めるために直大もこれに加わりました。二十九歳になっていた兼行も、直大の身のまわりの世話係として、この一行に加わりました。直大と兼行は、とちゅうで視察団と分かれてイギリスのロンドンにわたり、オックスフォード大学の留学生として、文学や経済学を学び始めました。その間、兼行はヨーロッパ各地の美術館や博物館で多くの美しい彫刻や油絵などを目のあたりにし、そのすばらしさにおどろき、心をうばわれました。

兼行が滞在していたころのヨーロッパ　◎は兼行が住んでいた都市

明治七年(一八七四)秋、一時帰国していた兼行は、直大とともに再びロンドンにわたりました。その時、直大は妻の胤子もいっしょに連れて行きました。ロンドンについた胤子は、ダンスやピアノのけいこを始め、ししゅうもするようになりました。そのうち、ししゅうには絵の勉強が必要だということで、兼行を油絵の勉強にさそったのです。二人に油絵を教えたのは、リチャードソンという人です。

兼行は仕事のかたわら、大学で三年間経済学を学ぶと同時に、油絵にも取り組み始めました。しかも、もって生まれた才能と意欲的な制作態度で打ちこんだため、わずか一年たらずで、ロンドンのてんらん会に入賞するようになったのです。兼行は、少しの時間を見つけてはリチャードソンの教えを受け、風景画などを中心に制作活動にはげみました。胤子は、兼行のよき理解者となり、かげで助けました。

明治十一年、直大夫妻は日本に帰国することにしましたが、兼行の洋画に対する熱意を感じた二人は、パリで一年間、油絵の勉強をすることを許しました。兼行は、心細く思う反面、油絵に打ちこめると、心がおどるようでした。

パリでの一年間は仕事からはなれ、ひたすら油絵の制作にかかりました。この時期は、パリ美術学校の教授であったレオン・ボンナに学び、人物画を中心にえがきました。そして技法も上達し、遠近法や※陰影表現なども取り入れて、

バーナード城（宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）

どっしりとした量感や質感のある作品をえがくようになりました。

兼行は、明治十二年(一八七九)秋、五年ぶり帰国しました。帰国するとすぐに、病気で入院している胤子を見まいに行きました。その時、胤子の娘朗姫が、母を心配そうに見守っているけなげなすがたに大変心をうたれ、さっそく「朗姫像」の制作に取りかかりました。この作品は兼行の日本における最初の作品となりました。胤子は看病のかいもなく、翌年、この世を去りました。兼行の洋画の勉強をかげで支えてくれていた胤子でした。兼行のかなしみは、どれほどだったことでしょう。この年、直大がイタリア駐在※特命全権公使としてローマにおもむく時、兼行も三たびヨーロッパにわたりました。

兼行の仕事は以前にもましていそがしくなりましたが、そんな中にあっても、兼行の洋画に対する情熱はとどまることをしらず、ローマ美術学校教授のマッカリに学び、ひたすら油絵の制作にかかりました。

朝起きるとまず油絵をかいて、それから仕事に出かけました。また、公使館の仕事や直大の世話のかたわら、少しでも時間があればキャンバスに向かいました。その意欲的な制作態度には、専門の画家たちでさえもおよばないくらいでした。この時期えがいた女性の裸婦図は、日本人としては最初ではなかったかと言われています。

マンドリンを持つ少女
((財)鍋島報效会所蔵)

当時、兼行の絵や技法は、それまでの日本のものとあまりにもちがっていたので、そのよさはあまり受け入れられませんでした。しかし、その後、日本でも油絵をえがく人がふえてくると、そのすばらしさが人々にもわかるようになりました。兼行の絵や技法は大いに見直され、日本の近代洋画の発展につくした人々に受けつがれていきました。同じ佐賀出身で、昭和十七年日本で最初の文化勲章を受賞し、日本の近代洋画をかくりつし、多くのすばらしい人材を育てあげた岡田三郎助は、若いころをふりかえって、こう語っています。

「わたしは、絵を八歳ごろから好んでえがいていた。しかし、最初から百武兼行のえいきょうを受けることが多く、子供ながら、陰影を入れた絵をえがいていた。鍋島藩邸には、この人の絵がたくさんあって、わたしをおおいに引きつけたものである。」

外交官としても高く認められ、イタリア政府から勲章を授けられた兼行でしたが、帰国後、病気のために四十二歳の若さでなくなりました。

はるか、遠い異国の地にあって、ひたすら絵をえがき続けながら、また外交という国際的な仕事で活やくした百武兼行は、いわば、今日の国際化時代の先駆者ともいうべき人でしょう。

鍋島直大像（(財)鍋島報效会所蔵）

ライオンと格闘する男（(社)霞会館所蔵）